

性の多様性を学校教育の中で扱うことへの教師の意識

—群馬県の教員を対象にした質問紙調査の結果から—

茂木 克浩

Teachers' Awareness of Dealing with Gender Diversity in School Education

— From the results of a questionnaire survey to teachers in Gunma Prefecture —
Katsuhiko MOGI

Abstract I investigated how teachers think about gender diversity and what they treat in schooling. As a result, it was found that many teachers believe that gender diversity should be conducted in school education. However, on the other hand, it was understood that the proportion of practice was small. As a factor, it has been found that teachers themselves have never learned about gender diversity professionally, and that they are not confident in their knowledge.

Keywords: *Sexual Minorities, Diversity, Questionnaire survey, Teacher, Gunma*

1. 研究の目的

筆者は多元的共生社会の実現に貢献できる美術教育のあり方について研究している。その具体的な方法として、実社会にある課題について向き合い、考えることのできる美術の授業題材の開発と実践を行ってきた。現在は、セクシュアル・マイノリティ当事者が抱える課題、性の多様性に関わる問題に注目し、それと向き合うための図工・美術の授業題材の開発を当事者¹⁾と共に進めている。

昨今、性の多様性に関わるニュースを頻繁に目にするようになった。同性婚やパートナーシップ制度、就労、賃貸契約に関する問題など、その内容は多岐に渡る。中には学校教育に関する話題も多く、特に制服のジェンダーレス化についてのニュースはくり返し取り上げられている。筆者らが実践のフィールドとしている群馬県でも学校現場における、ジェンダーレス制服の導入が進んでいる²⁾³⁾。性の多様性への取り組みが、学校現場で行われていくことは、歓迎すべきことだと考える。しかし、制服を見直すという具体的な取り組みばかりが先行し、それを受け入れる教員や生徒の姿勢はできているのであろうか。今の学校教育において、性の多様性についての基礎的・基本的な知識を学ぶ機会は保証されている

ののだろうか。今、一つのブームのようにになっている制服のジェンダーレス化ではあるが、とりあえずそれをやっておけば「セクシュアル・マイノリティについて理解のある学校です」と言ってしまう免罪符のように感じている。本当に必要なことはただ制度を見直すだけでなく、性の多様性についての正しい知識と共に、誰もが当事者であるという自覚を持ちながら多様な性のあり方を受け入れることのできる姿勢をもった人材を育成することのはずだ。

人材育成のためには、教育現場での取り組みは必要不可欠である。性の多様性について学ぶことのできる学校現場向け教材を作成し、講師の派遣等も行っている認定特定非営利活動法人 ReBit は「多様な性に関する授業を実施することで、中学生や高校生の多様な性に関する知識得点だけでなく、価値・態度得点が有意に上がることが分かりました。」と報告している⁴⁾。また学校教育における性の多様性の問題に詳しい渡辺大輔は、性の多様性についての学びは特定の教科ではなく全ての教科、学校教育全体を通して行われるべきだと論じている⁵⁾。このように先行的実践や研究から、学校教育の中で扱うことの有効性や必要性が示されている。しかし、筆者が専門とする美術の授業に関しては、性の多様性について

て扱ったという授業実践の報告は数える程度しかない⁶⁾。教科によって実践の蓄積状況は異なると思うが、まだまだ「学校教育全体を通して」という状況にはほど遠いのが現実だと考える。

今回題材開発をするにあたり、現場の教員が性の多様性を学校教育で扱うことについて、どのような意識を持っているのか調査することにした。なぜなら、授業を実際に行うのは子どもたちの目の前にいる教員であり、学校教育で扱うことに対する彼らの姿勢が現場での実践の広がり大きく影響すると考えたからである。

本調査の結果多くの教員が、学校教育で性の多様性を扱うことについて積極的な姿勢を持っていることがわかれば、渡辺が提唱する全教科、学校教育全体を通した学びが広がっていく土壌があると言える。一方、積極的な姿勢を持っている教員が少ない場合、性の多様性を扱った実践が学校現場の中で広がっていくことは難しいと考えられる。いずれの場合においても現状を把握することで、それぞれに適した支援策を検討することに繋がると考える。

今回の調査は、開発した題材の実践を行う予定である群馬県で行った。調査の目的は、県内に勤務する教員が、学校教育において性の多様性を扱うことによりどのような意識を持っているのかを把握することである。なお教員の性の多様性に関する意識について調査したものとしては、全国的に調査をしている日高(2021)のもの⁷⁾、福岡県内の教員を対象にアンケート調査をおこなった眞野(2018)のもの⁸⁾、北海

道内の教員を対象にした木村(2020)のもの⁹⁾等がある。筆者が把握している限りでは群馬県の教員を対象にした同様の調査はなく、本調査は群馬県内の教員が性の多様性を学校現場で扱うことについてどのように考えているのか、その傾向を把握する一助になると考えている。

2. 研究方法

調査にあたって、今回は群馬県内の小学校、中学校、高等学校全13校に調査協力を依頼し、そこに勤務する教員に対して質問紙による調査を行った。その結果287名からの回答を得た。その中から、教諭以外の職種であった2名分を除いた285名を有効回答とした。なお本調査においては、回答者の性別、性自認や性的指向などに関する質問は行わないものとした。本調査は2021年1月～2021年3月の期間に実施し、回答のタイミングや回収の方法については、各学校の現状に合わせて、本来の業務の負担にならない範囲内で実施してもらった。

本調査における回答者の年齢区分は50代と30代が多く、40代が少ないという結果になった(表1)。なおこの分布については、文部科学省が実施した「令和元年度学校教員統計調査」¹⁰⁾の結果と概ね同じ傾向であった。また、それぞれの専門とする教科についても訪ねたところ表2のような結果となった。集計にあたっては、小学校に勤務する教員については、専門教科が回答されていた場合はその専門教科で集計した。また「小学校」「学級担任」と書かれていた

表1

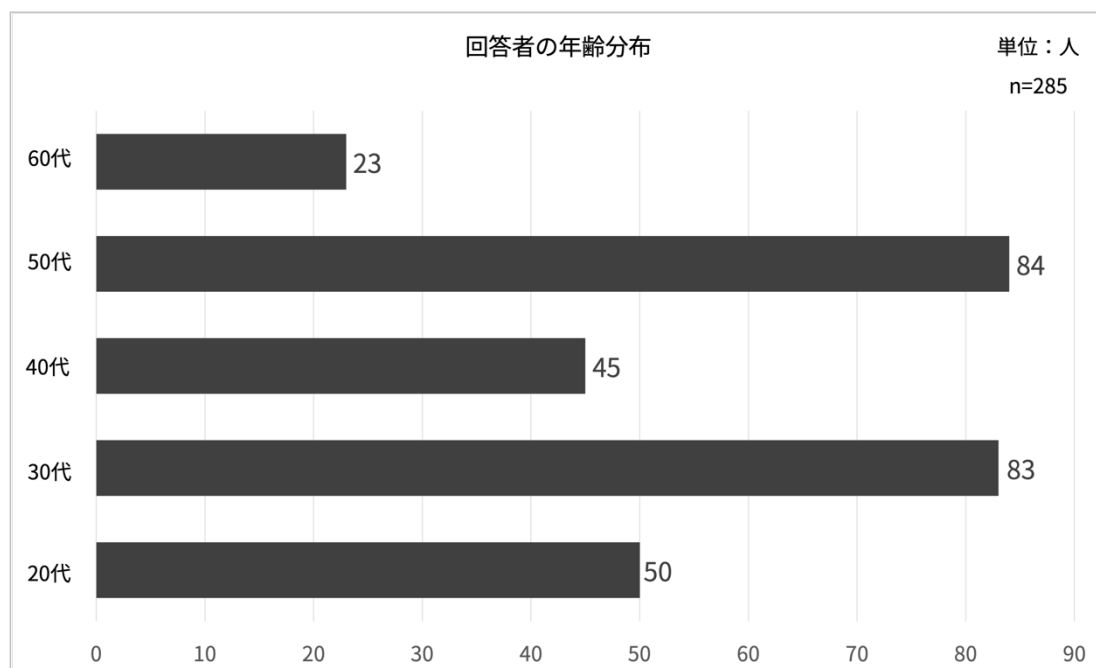
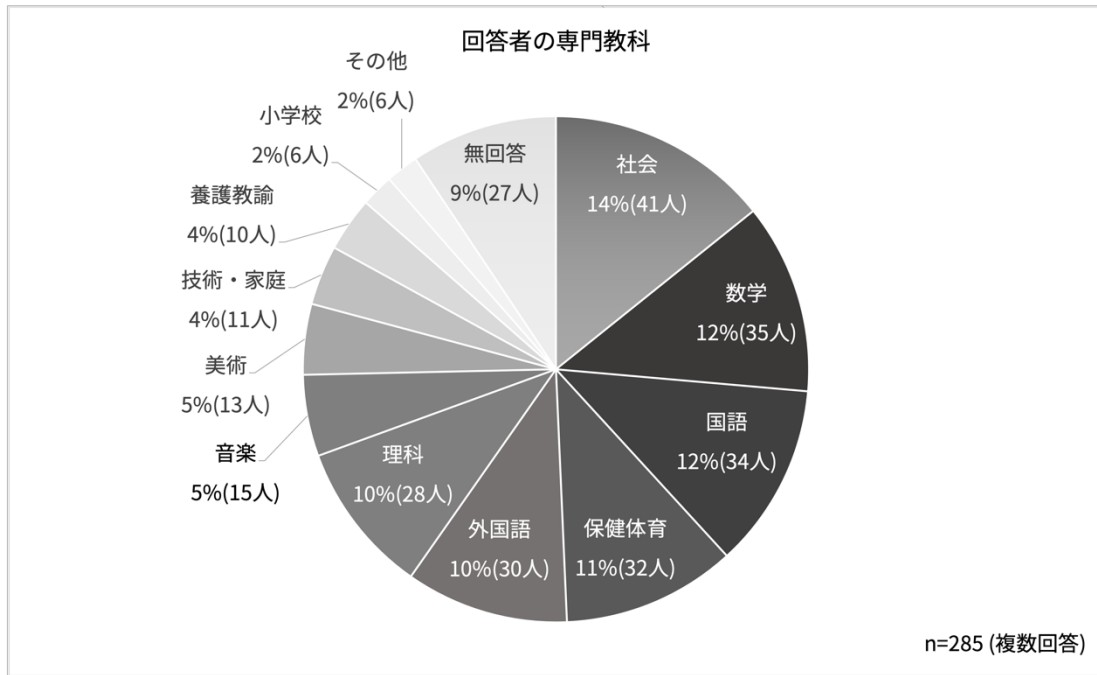


表 2



場合は、「小学校」として集計した。「英語」という回答は「外国語」として集計した。なお商業、宗教、特別支援、栄養教諭は「その他」としてまとめて集計した。

きると回答したのは「セクシュアル・マイノリティ」については41%、「LGBT」については53%となった。ここから単語自体は知っているものの、その意味について自信をもって「きちんと理解できている」と言える教員は半数になってしまうということがわかる(表5)(表6)

3. 調査の結果

(1) 性の多様性に関する言葉の理解について

ここからは各質問の回答状況について報告する。はじめに、現場の教員が性の多様性に関する単語をどの程度理解しているのかを把握するために、「セクシュアル・マイノリティ」「LGBT」という単語を聞いたことがあるか質問した。その結果、どちらの単語についても「聞いたことがある」という回答が90%以上になった(表3)(表4)。

表 3

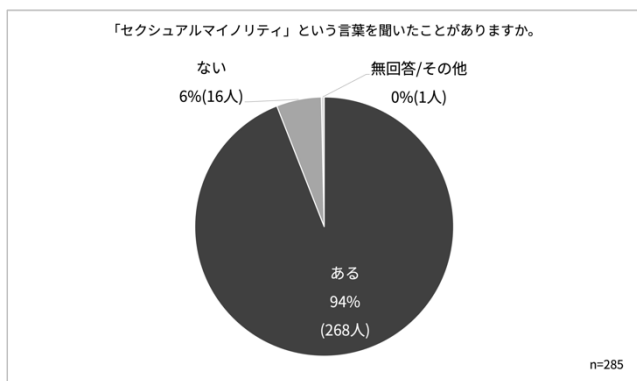


表 4

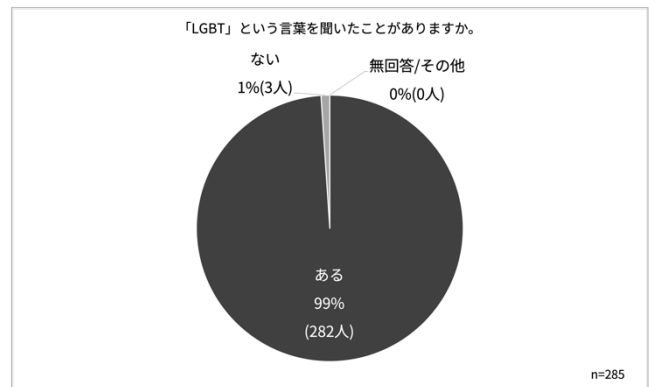
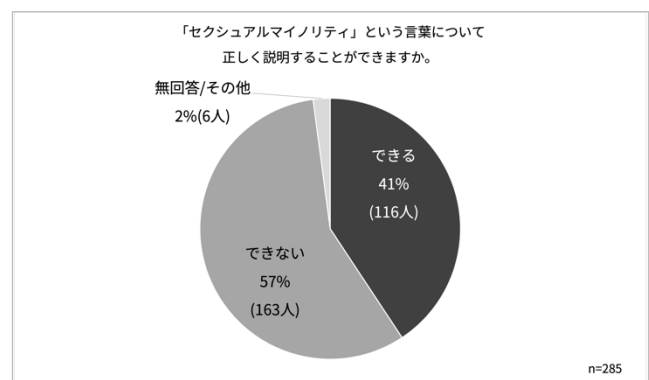
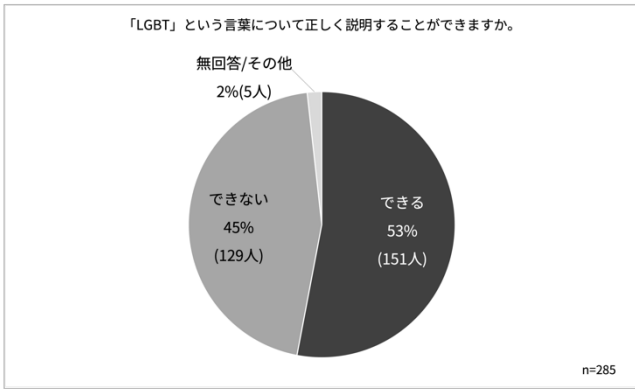


表 5



その一方、それぞれの単語について正しく説明できるかどうかについて質問した結果は、正しく説明で

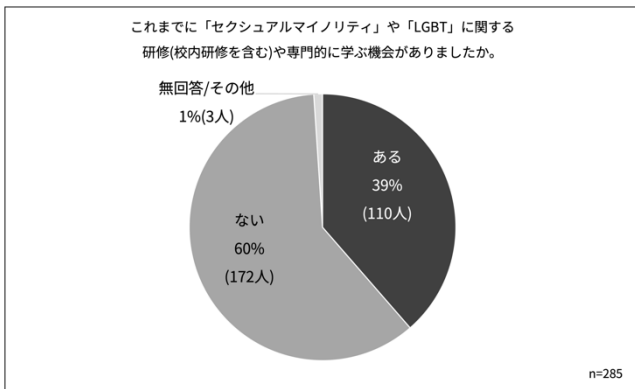
表 6



(2) 性の多様性について学んだ機会について

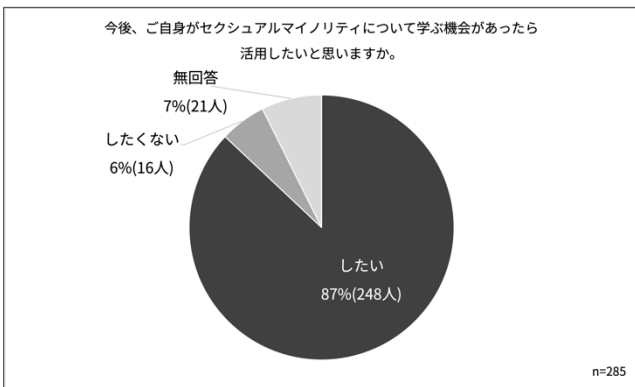
次に回答者が性の多様性についてどの程度学んできたのかを知るために、これまでの学ぶ機会の有無について質問した。その結果「ある」と回答したのが 39%であった。この結果から 60%の教師が特別に学ぶ機会をもたないまま今に至っている事がわかった(表 7)。

表 7



次に今後、学ぶ機会があったら活用したいと思うかという問いに対しては 87%が「したい」と回答していた。このことから、教員の多くが性の多様性について学べる機会があれば、活用したいと考えていることがわかる(表 8)。

表 8



(3) 学校の教育活動で扱うことについて

続いて、学校教育の中で性の多様性について取り扱うことについて各教員がどのような意識をもってい

るのか調査することとした。まず「性の多様性について、学校教育の中で扱うべきか」という質問をした。その結果 90%近くの回答者から「取り扱うべき」という回答を得た(表 9)。そこで「取り扱うべき」と回答した人に対して、「どの教科や時間で扱うべきだと思うか」という追加の質問を行った。その結果「道徳」という回答が一番多く、ついで「体育」「総合」という結果になった。一方で回答数が少なかった教科は、下から「数学」「音楽」「技術」となった(表 10)。

表 9

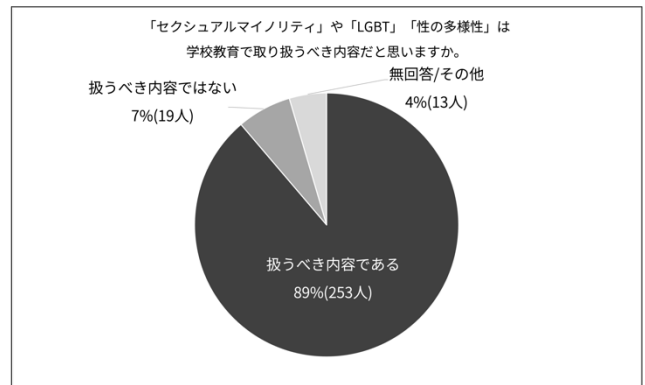
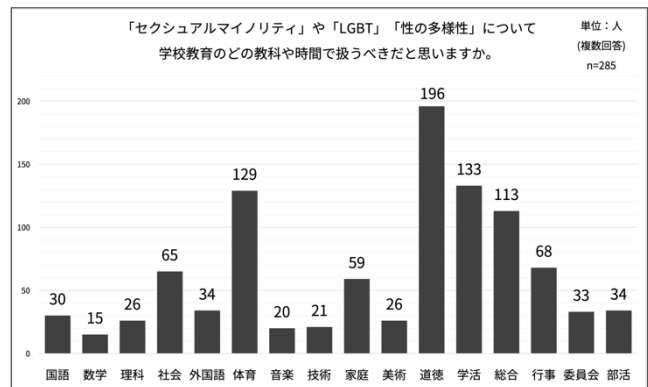


表 10



次にこれまでに自身の教育活動の中で性の多様性について扱ったことがあるかどうかについて質問した。その結果「ある」と回答したのは 24%であり、74%の教員が授業で扱ったことがないことがわかった(表 11)。

表 11

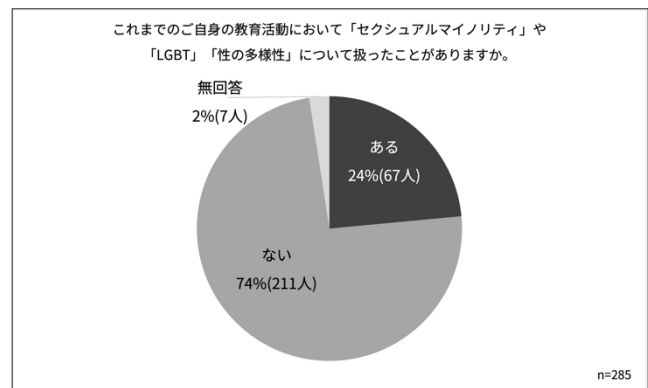


表 12

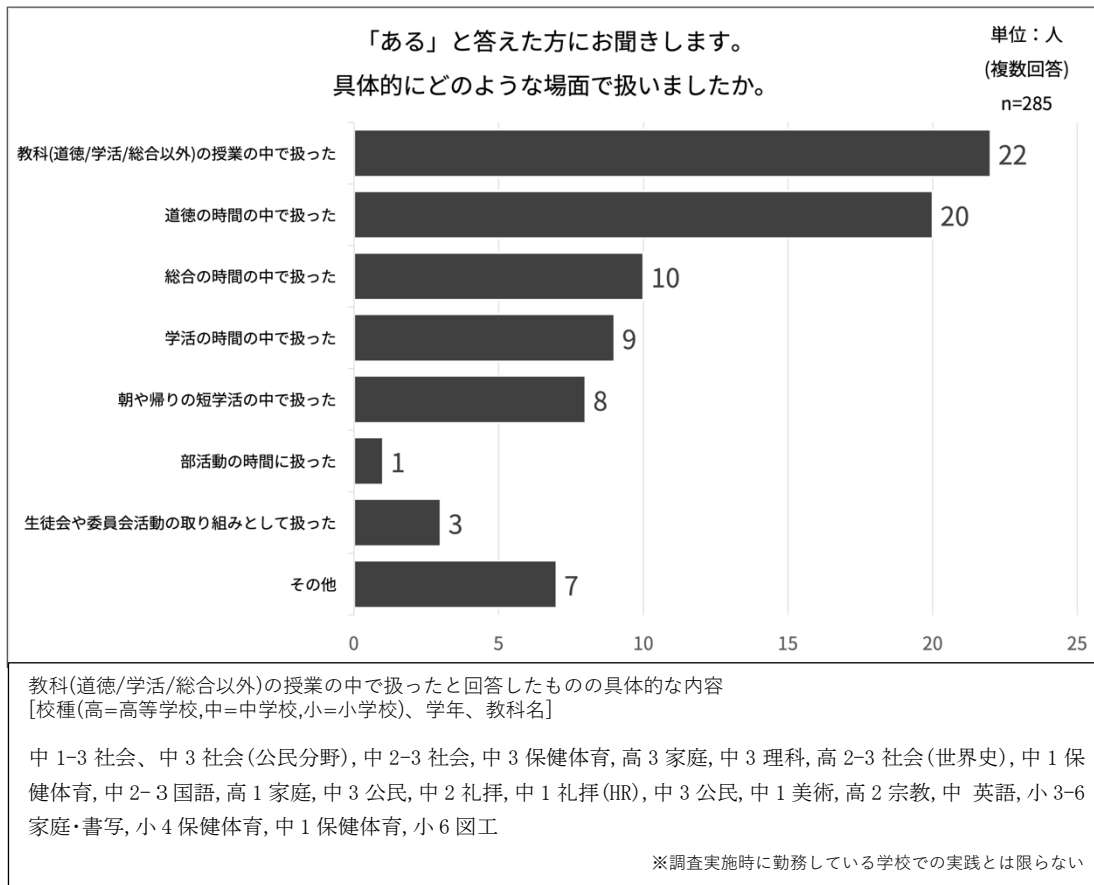
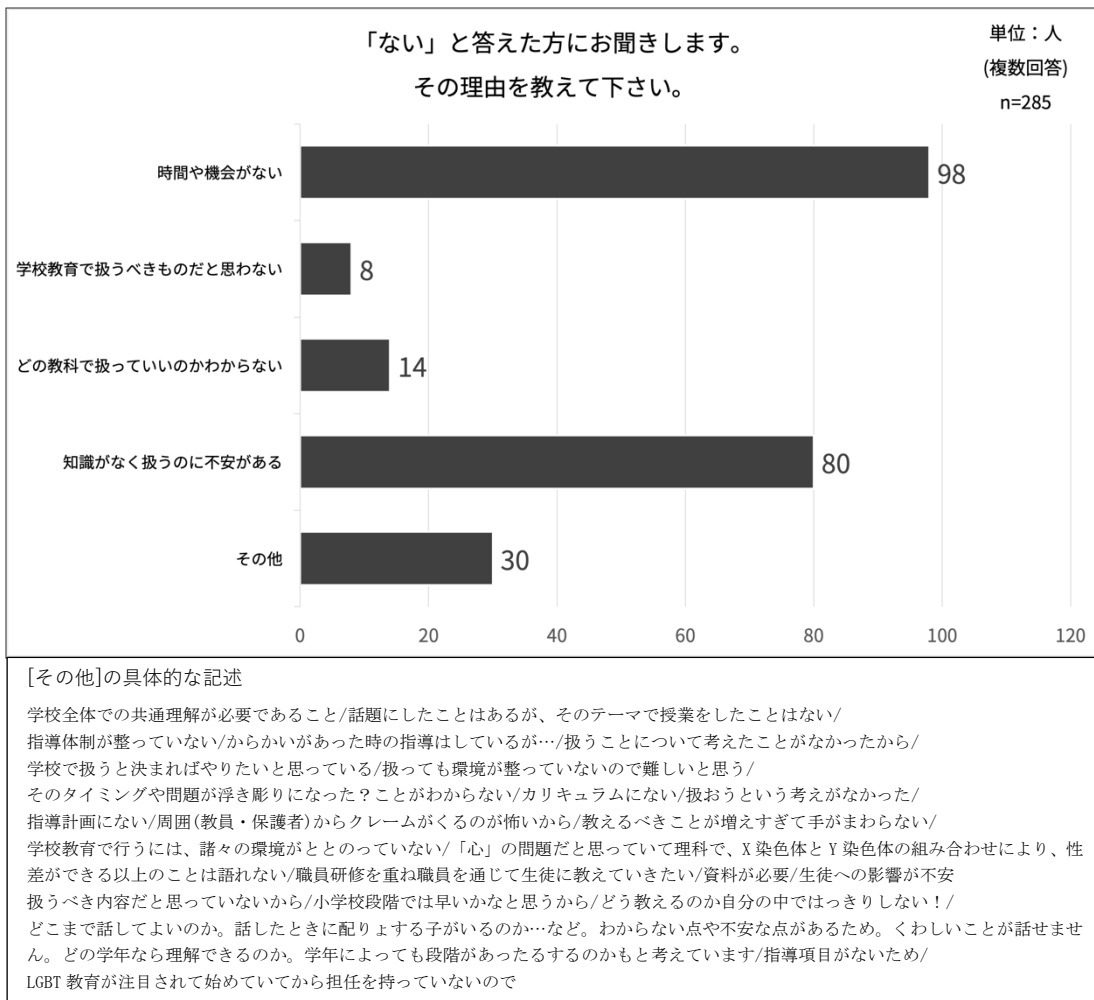


表 13

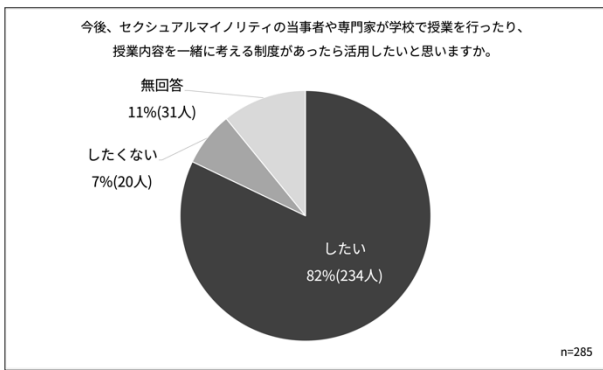


この結果を受け、「教育活動の中で取り扱ったことがある」と回答した人には、「どのような場面で扱ったことがあるか」という質問に追加で回答してもらった。その結果「教科の授業で扱った」と「道徳の授業で扱った」という回答が多く、それぞれ 20 名程度であった(表 12)。

これに対して「教育活動の中で取り扱ったことがない」と回答した人に対しては、そのように回答した理由を聞いた。その結果「時間や機会がない」との回答が 90 人と最も多く、ついで「知識がなく扱うのに不安がある」という回答が 80 人から寄せられた(表 13)。

「今後、当事者や専門家が学校で授業を行ったり、授業内容を一緒に考える制度があつたら活用したいと思うか」という問に対しては 82%から「したい」という回答を得た。このことから当事者や外部の専門家との協力に前向きな教員が多いことが分かった(表 14)。

表 14

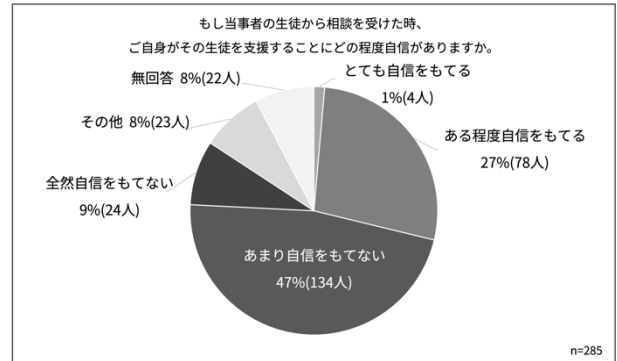


(4) 当事者を支援するにあたっての自信について

次に当事者生徒から相談を受けた時に、どれくらい自信をもって支援にあたるかについて質問した。その結果「とても自信をもてる」「ある程度自信をもてる」と回答したのが合わせて 28%であったに対して、「全然自信をもてない」「あまり自信をもてない」との回答が合計で 56%であった。なおそれぞれの選択肢の間に印をつけるような形で回答のあったものがいくつかみられた。それらはまとめて「その他」に分類した。このことから、半分以上の教員がセクシュアル・マイノリティ当事者から相談を受けた場合、その指導・支援に自信をもてないと自覚していることがわかった(表 15)。また回答した理由を記述してもらったところ、「とても自信をもてる」「ある程度自信をもてる」と回答したものについては、これまでに当事者の子どもから相談を受けたり、それに関わる支援や指導したりという経験を有している

場合や、回答者の身近に当事者がいるというものが多かった(添付資料 1)。それに対し、「全然自信をもてない」「あまり自信をもてない」と回答した理由については「指導の経験がない」「教員自信の知識不足」「これまでに当事者と関わったことがない」というような記述が多く見られた(添付資料 2)。

表 15



4. 考察

ここまでの質問紙調査の結果から、学校教育の中で性の多様性を扱うことについて、教員がどのような意識をもっているのか、その現状を考察していきたい。

大半の教員が「セクシュアル・マイノリティ」や「LGBT」という言葉を知っていると答えた。しかし、それについて自信をもって正しく説明できるかと問われると、その数は半減してしまう。これはつまり、半分近くの教員が、基礎的・基本的な知識を持ち合わせていないということである。この原因の一つとして、これまでに性の多様性について学ぶ機会が、教員自身にも保証されてこなかったということが考えられる。もちろん学ぶ機会があっても、様々な理由でそれを避ける人もいであろう。しかし、学ぶ機会があれば活用したいと考える教員が 87%いることを考えると、本人たちが学ぶ機会を避けてきたのではなく、単純に学ぶ機会に恵まれなかったと考えるのが自然である。

性の多様性について学校教育で扱うべきとの回答は 90%近くにのぼることから、それが子どもたちにとっても向き合うべき大切な課題であるという認識をもっている教員が多いことがうかがえる。しかしその一方で、実際に実践に取り入れたことのある教員は 24%と少ない。これについてはやはり、性の多様性について正しい知識をもっていると自信をもって答えることのできる教員が少ないことが影響して

いると思われる。正しい知識を持っているという自信がなければ、なかなか自らの実践の中で取り扱ってみようとならないはずである。実際に実践をしてこなかった理由として、自らの知識不足をあげている教員も多い。

またこの知識不足の影響は、教育活動の実践についてだけでなく、当事者の子どもを支援する場面にも影響する。各種調査によって8~10%がセクシュアル・マイノリティ当事者であると言われている。これを踏まえれば、各教室に数名程度の当事者がいることになる。彼らが何の不安も不自由もなく生活できているのが一番の理想である。しかし、ヘテロセクシュアル・シスジェンダーを基本とする学校文化の中では、自分の性のあり方や、周囲との人間関係に悩むことも少なくないと思われる。その上、学校の授業や教育活動の中で多様な性のあり方について教えてもらう機会がないとすれば、さらに彼らの不安は大きくなるのではないだろうか。そのような境遇に置かれるセクシュアル・マイノリティ当事者の子どもたちにとって、正しい知識をもち自らを支えてくれる教員の存在は大きいはずである。しかし現実には、当事者の生徒から相談を受けた場合「自信をもって指導できる」と回答したのはわずか28%にとどまっており、56%の教員が「自信がない」と回答している。また「自信がない」と回答した理由に、自らの知識不足をあげている場合も多い。このことから、教員を対象にした性の多様性についての学びの機会を保証すること、それらの場をきちんと設けることの重要性がわかる。

さらに「生徒を支援することに自信をもてる」と回答した教員と「自信をもてない」と回答した教員、それぞれの理由に注目してみたい。自信をもてないと回答した教員の理由の中によく見られたものとして、「知識がない」というものの他に、「いまで指導の経験がない」「当事者と関わったことがない」というものがあつた。一方で自信をもてると答えた教員の理由の中には「既に支援・指導をしたことがある」「身近に当事者がいる」というものがみられた。ここから、これまでにセクシュアル・マイノリティ当事者と教員自身とが関わりをもった経験の有無が支援・指導する上での自信に影響してくることがわかる。これに関連して80%以上の教員が「今後、当事者や専門家が学校で授業を行ったり、授業内容を一緒に考えたりする制度があつたら活用したいと思うか」という質問に対して「したい」と答えている。

これは非常に前向きな回答である。例えば、当事者と学校現場とがうまく連携することで、授業を検討する過程の中で教員と当事者との交流が生まれ、結果としてそれが教員の自信につながることも考えられる。

実際に教育活動として取り入れることを想定した場合、多くの教員が「道徳」や「学級活動(学活)」「総合の時間(総合)」を候補に上げていた。これは「性」というものが全ての人に保証される基本的人権の一つであり、これまで人権教育について中心となって取り扱ってきた時間が「道徳」や「学級活動」「総合の時間」という現状を受けてのことだと考えられる。実際に実践を行ってきたという教員の回答でも「道徳の時間の中で扱った」という回答が多かった。「教科の中で扱った」という回答については「社会」が多かったものの、いくつかの教科に分散していることから、実際は「道徳」の時間で扱われていることが一番多いと考えられる。

また9教科の中では「保健体育」という回答が多かった。これについては、内容の中で身体の成長やそれに伴う心身の変化について扱う教科であるという認識から、選ばれたのではないかと予想できる。それ以外の8教科での実施については、「道徳」「学級活動」「総合の時間」の回答数の半分、もしくはそれ以下という回答数であった。このことから多くの教員の中には、性の多様性については様々な教科の中で扱うというイメージがないことがわかる。この原因としては、性の多様性に関する教員の知識不足も影響しているかもしれないが、具体的な授業実践の蓄積が不足しており、具体例がないことによって授業のイメージを持ちづらいということも考えられる。

5. 結論

それぞれの調査結果からわかるように、多くの教員が学校の授業や活動の中で、性の多様性について学ぶ機会を設けることが必要だと考えていることがわかつた。しかし、必要性は十分認識していながらも、実際に授業の中で取り扱ったことのある教員はごく少数であった。その理由としては、教員自身に知識がないことやそれを扱っている時間がないという理由があげられていた。またどの教科で扱うのがよいと思うかという問いに対しては、学活や道徳、総合、保健体育と回答した人が多く、残りの教科に

ついて答えた人は少数であった。

以上のようなことから、学校教育の中で性の多様性を扱うことについて多くの教員がその必要性は認識しているものの、教員自身の自信の無さ等のいくつかの理由から現状では、それを具体化するまでには至っていないということがわかった。

6. 今後の展望

本調査から、本論考の冒頭で触れた渡辺の提唱する、学校教育全体を通じた多様な性の学び¹¹⁾を実現させていくためには、様々な視点から教員を支援していくことが必要であるという課題が見えてきた。

本調査を実施した群馬県は、茨城県、大阪府に続いて全国で3番目に都道府県としてパートナーシップ制度を導入した県であり、県内には市町村単位でも導入しているところもある。このように全国的にも先駆けた取り組みを行っていることは群馬県が性の多様性に関する問題に積極的に取り組んでいることとして評価するべきものと考えられる。しかし本当に大切なのは制度を整備したことではなく、この制度を利用した人が生きやすい県になることである。そのためには、そこに暮らす人の姿勢、つまり多様な性を受け入れる姿勢が重要になる。人をつくるのが教育だとするのであれば、その土台にある学校教育に寄せられる期待と担うべき責任は大きい。もちろん県も性の多様性に関する啓発資料¹²⁾を作成したり、講師を招いての講演会や教職員向けの講座等も開催したりと教員を含む県民に向けて、積極的に学びの機会を提供している。しかしその効果が学校現場まで広がっているかと問われると、それはまだ十分ではないようである。

今回の調査で県内の教員の多くが、性の多様性について学ぶ機会を活用したい、学校教育の中で実践すべきだという前向きな意識をもっていることが明らかになった。しかしその一方で、これまで学ぶ機会に恵まれてこなかったことや、具体的な授業実践にまで至っていないという現状が明らかになった。

この課題を解決するためには、各教員単位、学校単位の取り組みに頼るだけでなく、県や市町村また教員養成校等が連携し、各種研修の充実や性の多様性について扱った授業を開講する等の方法で、学ぶ機会をより充実させていくことが必要だと考えられる。また、当事者や専門家と協働する仕組みを構築し、それを活用することで教員の知識不足をカバーしてもらいながら題材の開発やそれを使った授業実

践ができるのではないかと考える。またそのプロセスにおける交流も、教員の自信につながるものが期待される。そして各教員が実践を蓄積することで、各教科にあった授業モデルが開発され、さらに授業に取り入れやすく実践しやすくなっていくと考える。

本調査は決して規模の大きな調査ではない。そのため群馬県内の教員全体の状況を把握しているとは言えない。しかし、その傾向を知るための一助にはなると考えている。今回の結果をもとに、題材開発を進めると共に、教員を支援する方法を検討していきたい。

【謝辞】

お忙しい中、本調査にご協力いただいた各学校の校長先生、教職員の皆様方、また質問紙の作成を始め、研究全体にご助言を頂戴し、ご協力いただいた一般社団法人ハレルワ代表理事の間々田久渚氏に心から感謝申し上げます。

【附記】

本研究は JSPS 科研費 20K22232 の補助を受け実施したものです。

本研究は、足利短期大学倫理審査委員会による倫理審査(足短大輪委第5号)を受けて実施したものです。

引用・参考文献

- 1)群馬県の当事者支援団体である一般社団法人ハレルワの代表理事、間々田久渚氏と協働で題材開発を行っている。一般社団法人ハレルワ web[<https://harreruwa.tumblr.com/>](2022.02.10 アクセス)
- 2)朝日ぐんま「スラックス派 増加中」[https://www.asahigunma.com/20211022_1men/](2022.02.10 アクセス)
- 3)上毛新聞「制服自由選択 5 中学で導入 LGBTQ 配慮や防寒 館林市」[<https://www.jomo-news.co.jp/articles/-/29626>](2022.02.10 アクセス)など
- 4)認定特定非営利活動法人 ReBit「多様な性に関する授業がもたらす教育効果の調査報告 2019」2019, p.19
- 5)渡辺大輔『性の多様性を学ぶ』とはどういうことか」教育実務センター『高校生活指導』202 号,2016,p.62
- 6)大塚裕貴・茂木克浩「性的マイノリティについて知るための図画工作科の授業実践とその成果」『日本美術教育研究論集』第 54 号,2021,pp.125-133

- 7)日高康晴「教員 21,634 人の LGBTs 意識調査レポート」『子どもの“人生を変える”先生のことばがあります。2021』2021[<https://www.health-issue.jp/>]
(2022.02.10 アクセス)
- 8)眞野豊「“性の多様性”に関する教職員の理解——教職員に対するアンケート調査から——」『広島修大論集』第 59 巻,第 1 号,2018,pp.49-59
- 9)木村育恵「ジェンダーや多様な性に関する学校現場の現状—北海道における教員調査をもとにして—」『北海道教育大学紀要(教育科学編)第 71 巻,第 1 号,2020,pp.1-14
- 10)文部科学省「令和元年度学校教員統計調査(確定値)の公表について」2021
- 11)渡辺 同上
- 12)群馬県生活文化スポーツ部人権男女・多文化共生課「LGBT ってなに?～誰もがありのままの自分でいられるために～」2017

資料 1

「とても自信をもてる」「ある程度自信をもてる」と回答した理由

身近に知り合いがいるため/周りに LGBT の友人がいるため/過去にそのような生徒を指導したことがあるから/今までも身近な生徒にいたから/当事者の一人であるため/私自身、身近にいますので/個々の対応/根拠のない自信です/自分が理解しておく必要があるから。今は知識が少ない。/支援が正しいかは分からないが、話を聞いたり寄りそうことはできると思うから。/実際に生徒の対応をしたことがあるから/以前の生徒や知り合いにその傾向にある人たちがいたので理解ができると思うから/私自身がそういった方たちに嫌な印象をもっていない。純粋に支えたいと思える。/相談内容によるが、個人を尊重し、一緒に考えていく教育相談的な支援をしようと思っているから。/自分の周りに複数人いるから/個性の1つで普通のことなので/何件か、相談を受けたことがある/本人の個性の尊重、また本人が尊重される学級経営等を支援していくことができる/そういった教育について考えている方とつながりがあるので(支援団体をやっている人、研究している人など)/群馬県で活動している LGBT の NPO 法人など研修会を通して知っているから。団体とつながりながら支援していきたい。/深い知識を持っているわけではないが、生徒に寄りそい生徒の考えを尊重していくことで、生徒理解につながり、生徒の気持ちもやわらげることができると思うから。/友達の中に当事者が何人もいますので/その生徒がどう考え、どうなっていきたいかによって異なるので、他の生徒への支援と内容は同じだと思うから。/私のいとこがそうであるため/特別支援教育のインクルーシブの考え方に基づく支援体制をくむことの必要性を理解しているからです。もちろんとても難しいことであると思いますが。/いろいろな問題があるのは他者との関わりの中で生まれるが、自分の心を強くもってほしい、それが一番だから/過去にも相談を受けて対応した事がある為/友人知人にもいますので普通に接しているつもりです。/身近にセクシュアル・マイノリティのことにについて研究し、活動している方がいて相談できるから。/すでに何人もの生徒から相談を受けていて、今のところは支援できていると思う。学ばされることが多く、失敗しながら、ひとりひとりに寄り添っていかうと思っています。/性同一性障害を持つ生徒に接した経験がある。/私の身近な人に当事者が複数いたので、私自身が判断に困った際に相談できる相手がいるため。/生徒のために頑張るのは当然。ただ知識や支援方法を勉強しなければならないため不安がある。/自信といわれるとありませんが、美術という関わりの中で、作品や作家の多様性には触れているつもりです。作家仲間にも「セクシュアル・マイノリティ」当事者はおります。/これまでに対応してきたため。/その生徒の思いを支援したいという気持ちがあるから。ただ方法がわからない。/理解しているつもり。でも当事者ではないとわからないことはたくさんあるから。/教員の中でも研修をしていただいており、知識があるから。また私の知り合いでも当事者が複数人おり、相談に乗ったことがありました。/SDGs を学習する中や教職員研修を受けてある程度正しい知識を得ることができたので、支援していきたい気持ちを持つことができたから。/できる限りの支援はしたい。本人の意向をしっかりとふまえた上で。しかし、学校側のハード面ソフト面(規則など)のこともある。現在、マジョリティの考え方が主流であり、それとの兼ね合い。/今までにセクシュアル・マイノリティの方が身近にいて、話しをする機会も多くあったから。/一人の人間として尊重することは他の例と同様のため。/解決策というよりは話しを聞き受け入れられると思うので…/本人や保護者の気持ちを聞いた上で学校全体もしくは管理職との相談など(必要に応じて)他の生徒指導と同様の手段(本人の気持ちに寄りそうこと)で支援していくべきだから。/仲の良い友人たちがそうなので/自分の関わる全ての児童生徒を大切にしたい。知識が必要な時に学び身につける。/学級経営を行う際に互いに認め合えるクラス作りを目指しているから。/セクシュアル・マイノリティに偏見のない世代のため。しかし、専門機関にはあまり明るくない。/保護者や職場のいろいろな方と連携しながら解決していくことができそうだから。/その子に寄りそって話しを聞くことで考える機会となるので…/LGBT の友人もいて、その様子や心の変化を理解しやすい。また受け入れてきた経験から(高校生活を共にした仲から)あまり「異」だと思っていないため。/ある程度研修等で学んだ知識があるから。/実際にセクシュアル・マイノリティの方のお話を伺ったり、LGBT、性の多様性についての HP や冊子を指導に活用している。また今までの教え子に実際に悩みを抱える生徒がおり、寄り添ってきた経験から。/身のまわりの友達に LGBT の人がいる。NHK の番組などで理解を深めようとしている。/自分の知り合い(友人)に多数の LGBT の人がいるため。/そういう子の対応をしたことがある。/子どもよりも大人の偏った見方の方が多いと感じます。そこに手を入れるのも教育者の務めと思うため。/支援した経験があるから。/児童の気持ちによりそい、共に学んでいくから。/相談にはのれます。子どもにとって打ちあける場を持つことが大切だと感じるため。ただ、その子が必要としているアドバイスはしてあげる自信はありません。/ある程度は理解できていると思うから。/10代の頃考えたことがあったから。困り感のある生徒や児童はどの分野においても支援すべきだと考えている。それはセクシュアル・マイノリティだから、〇〇だからという差別をするつもりはない。しかし、経験がほとんどないため、はっきりと自信をもてるとは言えないし、何の支援に対しても人を支援するのは難しいと感じる。/当事者、保護者の相談を聞くこと、必要であれば外部機関とつなぐような支援はできると思うから。自分自身偏見はないし、自分の周りにもいたため。/よりそうことはできる。認めることもできる。しかし、専門的な知識はないから。/特別視する必要がないと思うから。どんな性であろうとその子その子であることに変わりはないから。/それが仕事だから。/研修等で学んできたから。

※記述されたままの掲載を基本としているが、あきらかな誤字等については最低限の修正を施した。

資料2

「全然自信をもてない」「あまり自信をもてない」と回答した理由

中学校の発達段階での周囲の理解が得にくいと思うから/本人の希望を全てかなえることはできないからです。学校は他の生徒も多く、集団生活で規則やルールも大切です。又、施設設備も限られている公立学校での本人の希望とすり合わせてかなえられることはやってあげたいです。/実際に相談を受けたことがないため、どのように対応できるか分からないため/知識がなく、適切な支援が行えるかが不安/指導経験がないから/同調するくらいしかできないと思うから。アドバイスする自信がない/実際に関わった経験がないから/知識がない。学校全体でやらないと教員内でも偏見をもつ人が出るため意味がないから/知識が不足しているから/その生徒への配慮等はある限りしたいが、すべて望んだ通りにできるかと言われたときに、全てかなえてあげることができないかもしれないので/知識もなくどのような支援が必要かわからない/セクシュアルマイノリティについての理解が乏しいため/自分自身も正しい知識や理解があるのかが不安なため/経験がなく正しい知識がないので/セクシュアル・マイノリティに関する知識に乏しい。/自分1人では対応するのに不安がある。相談にのって話を聞くことはできるが支援は協力者が必要だと思う。詳しくわかっていないため/自分に知識が不足しているため/"知識が不足している/古い価値観にもとづいた発言をとっさにしてしまうかもしれない不安"/1人では無理。協力してもらいながらの支援をかける。/どのように考え接するべきなのか、まだまだ自分が勉強不足だと思っているからです。/まだ経験もないし、しっかりとした知識等もないので/経験がないのでどのように対応したらいいのかわからない/まだ対応した事がない。どの様になるのか分からない。/自分に教えるだけの知識が少ない/知識、経験不足。ただこのような担任が扱えない(扱ったことのない)相談などはセクシュアルマイノリティにかかわらず、あることですので、関係機関・専門家・扱える先生方と連携をとって行うと思います。/配慮をどの程度したらいいのか分からないから。/まず自分がきちんと知識を身につけないと…/経験が浅いため/知識が十分でないから。/知識不足、また適切な対応とはなにかかわかっていない/自分自身の知識が少なく、どのような助言をするのがよいのか自信がない/前例を知らなかったり、周りの教員から理解を得られる自信がない。/あまり出会った経験がなく、支援の仕方を自分が把握していないため/理解し、受け入れられても、どう支援するかはまた別で、いろいろ配慮が必要だと思うから。/まだ理解不足だから/本人の勘違いかもしれない/経験がないので知識だけでは不安/話を聞くことはできるが、それ以上の要求には対応することは難しい。/生徒の悩みを聞くことはできるが、その事への専門的な知識がなく、扱いきれない内容もあるので…/生徒自身が「こうしてほしい」という要望をどこまで叶えてあげられるのか、周りの生徒に偏見をもたせぬようにするにはどうすればよいかわからない。/人間関係に自信がないから/知識もないし、自分も当事者ではないので、その子の立場に立つというのが難しいと思うから。/しっかりした知識がない状態でどれだけケアしてあげられるか不安。/よく理解していないので、よりそうくらいしかできないと思うから。/どんな支援が必要かわからないから。また、支援することで、まわりの影響がどうなるか、わからないから心配。/相談を受ける事は本人にすればカミングアウトすることであり、日常の様子やギャップがあるため/私自身が性的マイノリティではないので・・・/知識が十分でないから/まだ担任の経験が浅いため/知識不足/自分に知識が少ない/経験がないから/知識もないし、どうしていいかわからないから/認知できておらず、理解が進んでいないため/実際に当事者である生徒から相談を受けた経験があるが、自身の知識不足などもあり、十分な対応ができたとは言えない。/どう考えて支援すればよいかかわからないため/十分な知識がないから/何をやってその生徒の支援が完結となるのか、明確でない、話を聞いてすっきりするだけでよいのか、性的な部分にどこまで学校が責任を負うべきなのかわからないから/自分自身もっと知識が必要であると思う/中途半端な知識と理解で相談者を一生苦しめてしまうのではないかと感じてしまうから。/私自身は理解できても、周りや社会的にどこまで理解されるかは別のこと。「大丈夫」との内容でまとめることのできないこと。学校内の対応がされても、社会に出た時は同じような対応は未だ求められないことが多いから。/実は今相談をうけており、その対応をしています。その事を考えるときも生徒の性格や家庭環境によって、その対応は千差万別だということがあり。その部分と自分の今までの常識が変わってきている事の不安もあります。/デリケートすぎる。情報も少ない。情報も一般化していない。どこで学ぶかわからない。/経験がなく、知識も無いため。経験することで自信は持てると思う。/実際に相談というか自身が当事者であるという話を個人的に受けたことが何度かあり、私自身は何ら抵抗なく話を聞いています。どのような支援を求められるかにもよります。今の知識不足の状態では話を聞くことくらいで学級において皆で支援していくと動いていくとなると自信は低いです。/経験がないため。/実際に出会ったことがない。/自分自身の知識がまだなく、相談を受けた時の返答ができるかが不安。/今のところ自分自身が知識不足だから。/知識がない。/知識や応対方法の認識が不足しているから。/具体的にアドバイスできない様に思える。/どこまで踏み込んでよいか、自信がない。当事者を考えれば考えるほど、どう伝えてよいか迷う。/支援の方法に関する知識がない。/相談に乗ることではできますが、私自身も無意識のうちに加害者になっているから、という不安があります。学校のシステムや設備も整っているとは言いがたいので、“支援”となると自信がありません。/意識してしまうので余計なプレッシャーを感じてしまうから。/それぞれの状況も違うので、どの程度1人1人支援できるか。/知識が完璧とはいいたくないから。/自分が偏見をもたず寄り添うことができたとしても、周囲の生徒の見方・考え方で自分と同じように意識させることは難しいと思うから。/当人に対して対応はできると思うが、その子が受け入れられる環境を形成できる気がしない。/指導経験がない/十分な知識がなく、支援機関も乏しいため。/経験・勉強不足だと思うので。/経験がないからだと思う。/子ども(児童)の思いをどう考え、つたえていけば、知識もないので自信がない/自分の周りに当事者がいなかったから。/どう答えたら、本人のためによいのか迷ってしまうから。/経験がないから。/自分にきちんとした知識がない。/自分の指導・支援が正しいか自信がない。/自分の周りにそのような人がおらず、経験がないため、どのような対応をしたら良いかわからないから。/自分の中で、どのような支援をしてあげべきなのか、考えが定まらないからです。今の自分では話を聞いてあげることしかできないと考えています。/支援方法がわからない/話を聞いてあげることがもちろんしたい。するべきだと思う。しかし、支援となるとどんなことに取り組んだらよいのか分からない。自信はもてない。/知識がなく扱うのに不安がある/知識がない/自信に知識がまだないため。/自分が心から理解できているかどうか不安だから。/経験値が低いので。/知識としては知っていても、いざ相談されるときは、返答や指導にとまどう/個人的に考えはあるが、うまく伝えられるか心配がある。/共感して一緒に考えながらよりそうまでは。それ以上はもっと学ぶべきことがあると思っている。/どのように対応するべきかわからない。/何をどう支援したらいいかわからないから。/身体的な側面・精神的な側面等で一人で対応できるものではないから。/知識不足。それに合った学校体制を考えていく必要があるから。/経験不足。知識(相談に対する)不足。/子どもによりそうことはできても、「セクシュアル・マイノリティ」についての知識があまりないから。/知識がないので、当事者にとって満足のいく支援をすることに自信をもてません。/知識等が不十分。/経験がないから。/よくしらないから。/身近にそうした人と接したことがなく、どのようなことを相談されるのか予想がつきにくく、またどのような対処が適切なのか判断に迷うと思う。そういった人々に関わったことがないから。/個に対応することは可能であるが、学校現場はこの問題について全くといっていいほど関心・配慮がない。/どう言葉がけが適切なかわかると、難しく感じます。/自身の知識が不十分なため。/知識がないから。/実際関わってみて不安や心配事が見えると思うから。/どんな相談内容か具体的にでないのでわかりません。/知識不足。/自分自身に経験(担任した児童など)がないということが第一の理由です。本人がどうしてほしいのか何を悩んでいるか聞いて改善することではできるとは思いますが。周りの子達や(その保護者の方たちをふくめ)将来も関わっていく人たちにも理解してもらいたい。本人にとって良い環境で生活できるようにすると、難しく感じます。/どうすればよいかわかり、本人たちにとって良い環境で子どもたちのために支援したいです。/まだセクシュアル・マイノリティの児童を担任したことがないため。/知識不足/社会の中で理解が進んでいけば児童にとって身近な問題でないため差別を助長してしまう不安がある。/本人の意思は尊重したいが、周りへの説明ができない。

※記述されたままの掲載を基本としているが、あきらかな誤字等については最低限の修正を施した。

